

## 優秀賞

### 地球と人をつなぐ

茨城大学教育学部附属中学校

二年 戸崎陽菜

私は、幼い頃から自然が好きだ。釣り堀で魚を釣ったり、掴み取りをしたり、山に登ったりなど、自然に親しめる場所へ連れて行ってもらっていた。そして、私の祖父母は農家だ。だから、季節になると田植えをしたり、とうもろこしやネギの収穫をしたり、普段の生活の中でも自然に触れる機会が多かった。

「水」は私たちが生きていくうえで必要不可欠なものだと思う。自然に触れるたびに実感する。植物は、水がないと枯れて育たない。私たち人間や動物も水がないと生きていけない。まさに、「水は地球のめぐみ」だ。

しかし、水がもたらすのは、めぐみだけではない。

それは、水災害だ。

二〇一九年十月六日。台風十九号が起きた日だ。

住宅被害については、全壊が三千二百七十三棟、半壊・一部破壊が六万三千七百四十三棟、浸水が二万九千五百五十六棟だったそうだ。関東甲信越地方、東北地方を中心に停電や断水が相次ぎ、停電が約五十二万戸、断水が約十八万戸発生するなど、ライフラインにも大きな被害が生じた。（内閣府防災情報ホームページ「2019年（令和元年）令和元年度台風第19号」2024年4月閲覧）

台風十九号の影響により、私の父方の祖父母は、水が家の中に流れ込んでしまう被害に遭った。二階にまで水が到達したそうだ。周辺では木が倒れたり、家や瓦礫が押し流されたりし、道路を塞いでいるのをテレビで見た。

「祖父母は大丈夫だろうか。」

ニュースを見ているとそんな不安が募っていった。

水が少し引いたある日、家族みんなでボランティア活動をした。私は、ボランティア活動をするのが初めての経験だった。使えなくなった家電や家具、

流れてきた木やゴミを捨てられる場所へ運ぶなど、周りの大人の指示を聞いて活動した。まだ幼かったこともあり、大きいものを持つたり、素早く行動することはできなかったが小さなものでも、水を含んでいて動かすのは、大変な作業だった。やるべきことが終わったとき、他では感じる事ができない達成感を味わった。しかし、冷静になるとほんの少しか進んでおらず、胸がキュツと締め付けられるような感じがしたので覚えている。自分のしたことが少しでも祖父母や被災者の方々の力になれたらいいという気持ちだったのだが、自分の力があまりにも小さすぎたのを実感した。しかし、祖父母や被災者の方々から

「ありがとう。」

と笑顔で言われたとき、このボランティアを行って良かったと思った。今の自分がどれだけ恵まれているのかを改めて実感し、自分を見つめ直す良い機会となった。また、苦しい思いをしている人のために少しでも良いから自分にできることを実践することで、それがいずれ必ず大きな力になるということも

わかった。私が被災地のためにできたことはわずかだったが、逆に得たものは大きかった。この復興ボランティアで感じたこと、得たものを大切にして、これからは生かしていきたいと思った。

洪水の被害に遭った今、各地で洪水対策が行われている。少しでも被害が少なくなるように、少しでも悲しむ人が少なくなるように、対策をしていくべきだと思う。

水は必要不可欠なもので多くの恵みをもたらしてくれる。しかし、それとは裏腹に水災害にも隣り合わせだ。日本は、傾斜が急で険しい地形なゆえに河川は著しく、大雨になると急激に河川流量が増加し、洪水などによる災害が起こりやすい。だから、自分ができることをみんながすべきだと思う。

どの水でもやがて海へと続く。水が世界を繋ぐように、人と人を繋ぐような人に私はなりたい。